

# NAMIDA3

karinomaki

## 涙の夜

---

私の中には、悪魔がいる。しかし、それを徹底的に叩き潰してくれる精神科医の先生がいる。

ある日、先生に激しく怒られた私は、訪問看護師の所長さんに電話して言った。

「所長さん、私もう、今日中に死ぬよ・・・。」

所長さんはきっと、こういうケースになれておられるのだろう。こう言われた。

「マキちゃん、どうやって死ぬの？」

私は死ぬ気などなかった。ただ、死んでしまいたいとは思っていた。

私はぼろぼろ泣きながら言った。

「包丁で首を切って死ぬ。」

「うわあ、痛いで、それ・・・。」

所長さんは言った。

私は泣きながら電話を切った。

## 次の日

---

次の日、私は先生に電話をかけた。先生は冷たかった。夕方、また涙が出てきて、私は泣きながら何回も先生に電話をかけた。「先生なんか、大嫌い！！」と言うつもりだった。先生は一度も電話に出てくれなかった。

あきらめて私はとりあえず、次の日に再診の予約を外来にとった。  
何を言うかは考えていなかった。

## 再診

---

再診の待合で、車椅子の人にドアを開ける先生と目が合った。私の気持ちは落ち着いていた。先生、あのひどい言葉は、私を突き放す先生の言葉は、私がどれだけ周りの無理解な人を傷つけているかわからすためだったのでしょうか。私、がんばりますから。人をなるべく傷つけないように。・・・と言うつもりだった。しかし、診察室に入った私に、先生は冷たかった。先生は言った。

「四週間後診察の約束だっただろう！！どうしてそれが守れないんだ！！君は我慢するということができない。診察は終わりだ。」

私は食い下がった。「話だけでも聞いてください。先生。」しかし、先生は私に出ていくように言った。

私の感情はあふれた。「先生は私がそんなに嫌いですか！？」

「約束を守れないやつは大嫌いだ！！」

「先生には感情がないのです！！」

私の怒りがついに爆発した。

「先生は医師としてもう尊敬できません。次の診察のときに他の先生に代えてもらいます！！」  
私は荒々しく診察室ドアを閉めて診察室を出て行った。その日の診察は終わった。

## 勝利？

---

そのあと、しばらく私は茫然と座っていたが、こう思うことにした。私は先生に勝ったのだと。精神病患者でありながら、あの強い精神科医の先生に勝てた・・・と。しかし、次第に怖くなってくるのだった。無理もない。私はろくに働いたこともない、先生にやっと、病院の食堂で働かしてもらっている患者の一人、先生はみんなに深く尊敬されているA病院の精神科部長。私の恐れはだんだん深まり、押しつぶされそうだった。

そして、診察の日の次の日のお昼休みだった。  
休憩室からフラフラと出てきた私は、先生の大きな背中を見た。  
私は目を疑った。

先生が、私の職場に昼ごはんを食べに来たのだ。  
私の目に、涙があふれた。  
メガネを取って、私は先生の座る椅子に駆け寄り、繰り返した。

「先生、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・。」  
そして床に座り込んでわんわん泣いた。  
先生は少し笑っているように見えた。先生は言った。  
「君は工作中だね。さあ、仕事をするんだ。」

## 負け

---

こうして、私は先生に完敗した。スタッフのTさんが言った。「勝ったとか、負けたとか、言っているうちは、負けているのよ。」

こうして、私は、心の平安を取り戻した。

厳しく、優しい先生に鍛えられながら、ときにぶつかっても、恐れずに、先生の治療をこれからも受け続けたい。